

神様と私の「命」のつながり(信仰告白と私たち)

今年の5月22日に、初めての孫が生まれました。長女の家族に与えられた女の子です。私たち夫婦が結婚した時は、自分たちが「おじいさんおばあさん」になるなどとは想像出来ませんでしたけれども、「時」は着実に前へ前へと動いているのですね。時の流れは一面容赦のない残酷さのようなものもありますが、新しい命の誕生に触れるということは、理屈を超えた大きな喜びです。

まだ生後一か月位の赤ちゃんは、自分では何もすることが出来ません。動物の中でも人間の赤ちゃんは、特に弱い存在としてこの世に生まれて来る者のようです。まだ寝返りも打てませんから、すやすや寝ていない時は(そしてそういう時間が思いの他多い)、絶えず誰かが抱っこしたり見守ってあげていないとなりません。娘がポロっと言っていました。「シングルマザーの人は偉いと思う」と。私も、時々孫を腕に抱かせてもらいながら思うことは、赤ちゃんの頃のことは全く覚えてはいないけれど、ああ自分も24時間世話をするのを惜しまない大人の存在とその時間があつたからこそ、やがて寝返りもし、離乳食を食べ、二本足で立ち…ということに繋がっていったのだなということです。

一人ひとりの命が皆違い、尊いように、私たちの信仰の形も皆違います。ただ一点の共通項を除いて。それはイエス様の問い「あなたがたはわたしをだれと言うか」に対して、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」(マタイ 16:15~16 口語訳)と応答するということです。しかもこのペトロの告白の後、主はこう言われました。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」(17節)と。「信仰」の与え主はあくまで神様。つまり、私たちの手の内にはないので、私たちが自分の命の原点を覚えていないように。神様の愛が信仰を育んでくれるのです。

(丸山 勉)